



与那原町史だより

与那原町教育委員会 生涯学習振興課 町史編集室

TEL 098-871-9981 FAX 098-871-9982 郵送先 〒901-1303 与那原町字与那原712番地



故陸軍航空軍曹平敷好盛墓地奉仕作業 昭和17年6月26日

故 陸軍航空軍曹 平敷好盛 墓地奉仕作業

2列目左端が長嶺由康氏、3列目左から2人目が渡名喜庸憲氏 1942年（昭和17年）6月26日撮影 資料：長嶺由康氏（与那原区）

与那原町史編集室は、平成18年4月に活動休止した後、同年11月、新たな人員を配置し再開。定期的に編集委員会を開き、当面の活動内容を沖縄戦記録-『戦時記録編（仮称）』-の作成と定め、平成19年2月下旬から体験者の予備調査、4月下旬からは本調査を開始しました。

平成20年3月20日現在で42名の方からお話を伺い、これまで未調査であった与那原の兵舎、特攻艇、一般疎開、北部疎開、町内の陣地構築・壕掘り作業、作業への住民・学生の動員、沖縄戦中の南部避難、北部の食糧難などについて、重要な証言・資料を得ることができました。

『与那原町史だより』は、これら調査結果の一部を掲載し、町民の皆様へご報告するとともに、さらなる情報提供を呼びかけることを目的に発行するものです。

年1回の発行、限られたページ数ではありますが、関心を持って読んでいただけると幸いです。

また、証言・資料についてご協力をいただいた皆様、各区の区長・老人会長・民生委員の皆様へ、紙面をお借りして感謝申し上げます。

町史編集室では、平成20年度も沖縄戦当時のさまざまな体験を聞き取り、「戦争の悲惨さを、戦争を知らない世代に語り継ぐための資料づくり」に取り組んでまいります。皆様のご理解・ご協力をよろしくお願いいたします。

与那原町史編集委員会

（順不同）

- 委員長
吉浜 忍（沖縄国際大学教授、南城市）
- 副委員長
眞榮平 實（与那原町立郷土資料館長、森下区）
- 委員
新垣庸一郎（元高校教諭、新島区）
山内 敏春（元小学校教頭、江口区）
渡名喜興憲（元高校教諭、与那原区）
- 事務局（町史編集室）
辺土名 彬、諸見里 一、友寄 隆志
恩河 直美、富川 恵子、吉田 充泰

聞き取り調査
人々の証言①

旧制中学生の沖縄戦体験

江口公民館での座談会

ちょうせい
■ 辺土名朝盛さん

昭和2年生。江口区在住。昭和20年3月当時は、10区（港区の一部）に住み、私立開南中学3年生。

ひろし
■ 金城 廣さん

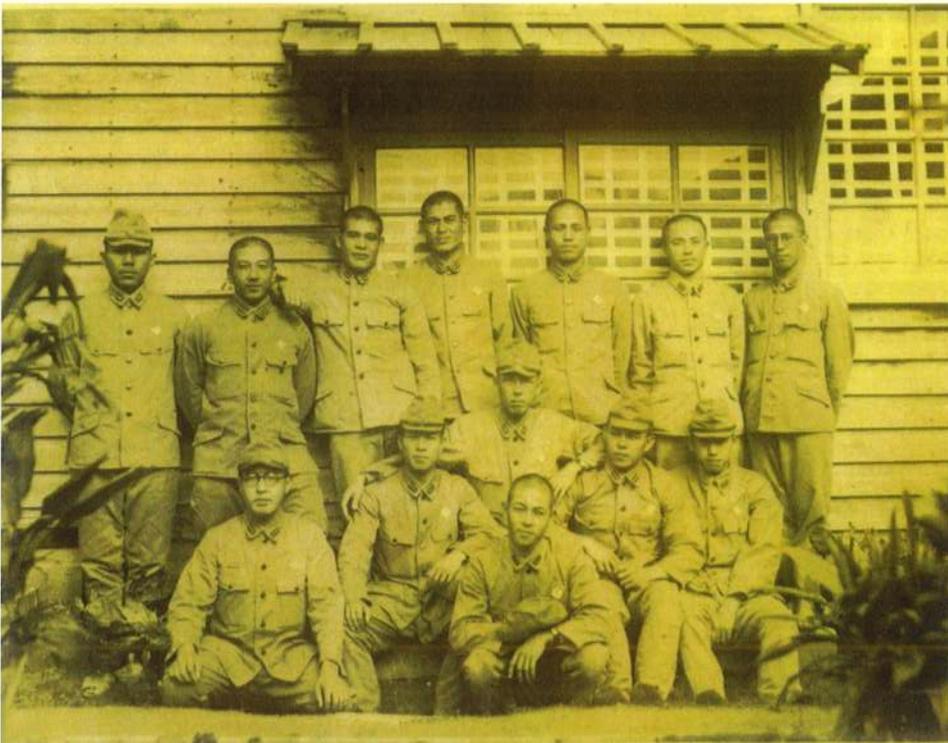
昭和4年生。江口区在住。当時は7区（江口の一部）に住み、県立第一中学3年生。

ゆういちろう
■ 福治友一郎さん

昭和6年生。浜田区在住。当時は3区（森下区）に住み、県立第一中学1年生。

としみつ
■ 山内 俊光さん

昭和7年3月生。江口区在住。当時は9区（江口区の一部）に住み、県立第一中学1年生。



中城湾臨時要塞司令部の若い兵士たち（現在の与小敷地）

1941年（昭和16年） 中城湾臨時要塞の建設。現在の与那原小学校敷地にその司令部と病院が置かれ、浜田区に兵舎が建設された。
1944年（昭和19年） 南西諸島防衛の第32軍が配置されると、要塞司令部は改編される。同年、学生らを動員し新兵舎建設（江口区）と港湾埋立（港区）が行われた。

1944年（昭和19年）撮影
資料：外間政太郎氏（那覇市）

◆与那原の「兵舎」「軍隊」「徴用」◆

山内：僕らの記憶では、江口と浜田に兵舎があつて、今の与那原小学校の敷地に軍の病院があつた。
辺土名：僕の三男兄貴が、浜田兵舎の陸軍上等兵としていた。

福治：僕は、浜田兵舎に入ったことがあります。壕掘りの帰りに、兵舎に行つて乾パン（※小型で堅く焼いたビスケット状のパン。日本軍の携帯食糧。乾麺麴ともいう）や金平糖

をもらった。

山内：江口兵舎を作つたのは、僕や福治さんが旧制中学に入學した昭和十九年であり、その作業に駆り出されている。それから港湾の埋立作業にも動員された。

福治：トロッコで（今の東浜橋付近へ）土を運ばされた。

金城：今の江口団地や江口公民館の近くから。

福治：作業の時は、昼飯は江口兵舎の中でもらつた。

金城：うちはね、江口の兵舎づくりでは、モッコを担いでいた。浜田兵舎へは、軍事教練をするといつて一週間かな、泊まつたことがある。昭和十七年の終わり頃だと思ふ。

当時の小学校（現在の青少年広場付近にあつた）は、新校舎が完成して第一大里国民学校から分かれたばかりだったけど、いくさが来たために兵隊に徴用された。卒業式だけは与那原の校舎でやったよ。与那原国民学校の第一期生はうちらだったからね。

辺土名：僕の場合は、垣花の高射砲隊や泊の高射砲隊の陣地づくりに参加し、また、読谷の飛行場づくりのため一週間泊まり込みで参加した。

金城：ここでは主に与那原学生会が壕掘りなどに駆り出されたが、十・

十空襲（昭和十九年十月十日）の後は、動員体制があまりとれなくなつた。

辺土名：今のクララ幼稚園の丘辺りで、中城湾向けに砲座を据え付ける作業があつた。その壕掘りに参加し、戦後、役場建設時に、壕の跡を見つけた。

福治：食糧の乾パンなどを置いておく壕をつくつていた。

山内：当時は名称を学徒勤労作業といつて、昭和十九年は、授業が四月から六月ぐらいで、後はずっと作業だった。

また、戦後見たのだが、（江口にあった）ナゲーラ川に横穴が掘られ、舟艇が隠されていた。おそらく特攻艇でしょう。

それから、先輩方から聞いた話であるが、昭和天皇が皇太子時代に沖繩にいらしておられる。沖繩出身の漢那憲和が艦長の戦艦「香取」に乗り、与那原の海岸に上陸し、街を通り、駅（現在の農協の位置にあつた）から鉄道で那覇へ向かつた。当時は、みんな頭を深々と下げて顔も見られなかつたという。

◆朝鮮人軍夫◆

福治：朝鮮人の男が一〇〇名くらいいたよ。どこかの壕掘りか何かから

夕方帰つてきて、（森下にあつた）与那原劇場の床に寝かされた。

金城：ある日、朝鮮人二人が間違つて料亭の玄関に入つていった。向こうから憲兵が二人来て、「朝鮮人が来るところじゃない」と言つて竹刀で殴つた。たまたまオジが通りかかつて、見かねたんでしようね。憲兵に向かつて「エーヒャー、やめろ。

こいつらも天皇陛下のために働きに來てるんでしよう。いじめるんじゃない」と。口論になつて憲兵は帰つたけど、散々だったね、あの朝鮮人は。

辺土名：警察署は、今の新島になるかな。当時は近くに照屋医院があつて、消防団もあつた。大きなクムイ（池）もね。

山内：火の見矢倉もあつたね。

◆十・十空襲◆

辺土名：十・十空襲の時、僕は汽車に乗つて那覇に通学途中だった。古波蔵付近で駅長が真っ青になつて「空襲、空襲」といつて汽車を止めに来たので、乗客は全員驚いて、すぐに小高い木の影に逃げ隠れた。僕は小高い丘の簡素な防空壕に隠れ、そこから小祿の飛行場や那覇港などが攻撃されるのを見た。

飛行機が來ない合間に、大里駅ま

で歩いて戻つてきた。途中で南風原の与那覇が燃えているのを目撃した。

行機だぞ」と。空襲だとわかり、学校にも近づけない。しばらくそこで待機して、与那原に引き返した。

福治：僕も繁多川陣地構築に行く途中で空襲を知つた。与那覇が燃えるのも見た。

十・十空襲の時は、江口にも爆弾が落ちていた。

山内：その日は作業があつて首里に向かつていた。首里の石嶺で部隊の壕掘りを命じられていた。今の南風原の新川から首里に通ずる道の途中で、飛行機が飛んでいるのを見た。演習だと思つていたら、「アメリカ軍の飛

山内俊光さんの体験



与那原学生会（親川にて）

1943年（昭和18年）頃撮影 資料：金城廣氏（江口区）

山内：昭和十九年に婦女子は疎開しなさいと、県外疎開があり、ひどくなつてからは県内疎開。うちの家族は親戚のいる大里の当間に行った。最初アメリカは具志頭の港川から上陸すると思つていた。それが中部に上陸し南部に來た。私は、最後は糸満の真栄平で捕虜になつている。陸軍の司令部も向こうへ行つていいるから、南に行きなさいと言われた。途中の道は死体がいっぱいでした。私自身は、弾の破片で額に傷を負つた。

「九死に一生を得た」というのかな。
しかし、戦争で姉を亡くしている。
どこで亡くなったのか、遺骨もあり
ません。姉は首里高女四年生で、看

護隊として従軍した。一緒に首里へ
通学し、そこで別れたのが最後でした。
軍国教育、それが沖繩戦の被害を大
きくしたと思う。

面に五、六メートルの穴があいた。
ここにはおれないと、我々はその夜、
東風平、糸満を隠れながら歩き、具
志頭の破名城に向かう手前の草むら
に隠れていた。向こうからアメリカ
カの戦車が来た。五メートルほどし
か離れていない。摩文仁へ弾をジャ
ンジャン撃っている。だから家族に
死んだふりをしなさいと言った。戦
車を通った後にブルドーザーが土地
を均したと思ったら、今度はGMC（米
軍トラック）がたくさん摩文仁に向
かって行く。草むらの中で一晩過ご
したら、日本兵が三名入ってきた。
北海道の人だったが、「あんたは手を
ケガしているし、地元の人だから、
アメリカもどうもしないはずだから」
と、日の丸を割いて包帯代わりにし
てくれた。翌日、米兵が来て銃で威
嚇し、立ちなさいと指示した。その
日本兵は持っていた手榴弾を投げた
けど、信管を抜くのを忘れて爆発し
なかった。それで助かった。

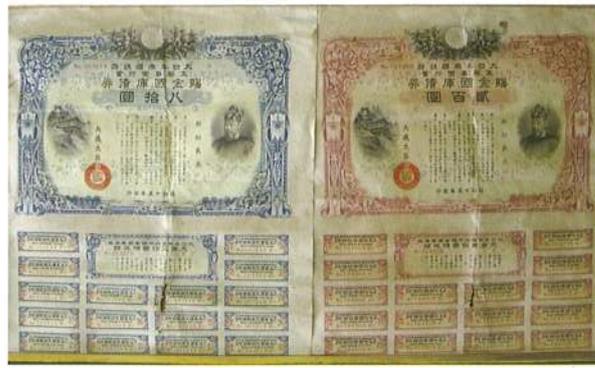
次は自分が続くからと涙も出なかった。
戦後も生き延びて申し訳ないと思った。
南部では阿鼻叫喚というのか、むご
い死体を見て、負傷者の助けを求め
る声も聞いた。戦争をしない教育が、
いかに大切かということだ。



紀元二千六百年記念保険証券

徴兵保険の証書。男児の幼いうちに加入すると、子ども
の徴兵等の時に保険金が給付される。

1940年（昭和15年）発行
資料：山内敏春氏（江口区）



支那事变行賞 賜金国庫債券

日中戦争の論功行賞として、功労者に支給する一時賜金の代わりと
して交付された。

1940年（昭和15年）発行
資料：新垣良英氏（新島区）

金城廣さんの体験

金城：鉄血勤皇隊に入るとき、
私は下痢をして、家族の避難
する大里村平良で一時静養す
ることを認められた。そこ
には与那原の顔見知りは何名も
いた。

山内：金城さんは、下痢のお
陰で命拾いした。そうでなけ
れば、爆弾を抱いて敵戦車に
向かって行ったかも知れん。

金城：昼は壕などに隠れてい
た。こちらは玉城・知念に行
くつもりが、具志頭の後原（くしほの）の
空き家に行つたおじいさん
が、「与那原から来たのなら、
途中はどうだったかね」と。「死
体がゴロゴロしていました」
と返事したら、「日露戦争
でも、そういうのは見たこと
がない。このいくさはあやし
いぞ」と言っておられた。
その晩、艦砲射撃か何かの、
ドスンという音がして、地

投降した時、日の丸の包帯をみた四、
五名のアメリカ人がワーツと集まって、
ある人は捨てようと、ある人は取る
うとした。あの光景は忘れないね。
その後、尋問を受け、診療所に行
って腐った手の肉を全部取ってもら
った。

軍国教育を受け、友達が死んでも、

辺土名朝盛さんの体験

次は自分が続くからと涙も出なかった。
戦後も生き延びて申し訳ないと思った。
南部では阿鼻叫喚というのか、むご
い死体を見て、負傷者の助けを求め
る声も聞いた。戦争をしない教育が、
いかに大切かということだ。

辺土名：昭和二十年、僕は暗号隊員
としての訓練を受け、「山部隊」に配
属され軍務に従事したが、訓練最後
の日に、教官から「敵は渡具知の海
岸より上陸せり」との電文を伝えられ、
「最後に親に会ってきなさい」と言わ
れて家へ帰った。その晩から艦砲射
撃が激しく部隊に戻れなくなり、や
むなく家族と共に行動することにな
った。教官が帰してくれなければ、
僕も生きていなかったかも知れない。

与那原から大里の南風原に避難し
たのは、昭和二十年四月か五月上旬。
民家の一室を借りて家族一緒に暮ら
した。与那原が燃えたのを大里城跡
から目撃したのは四月頃ではなかつ
たか。その後は、玉城、具志頭、糸
満へ行った。

糸満の糸洲のヤギ小屋の近くでの
ことだが、僕の頭に石のようなもの
が当たって気を失った。しばらくし
て下を見ると、隣りにいた人の頭が

落ちていた。僕の髪にはその血糊が、一か月くらいべっとりついていていたが、水のない所に抑留されていたため、洗うこともできず、そのままの状態だった。

最後は喜屋武岬へ。米軍が一〇〇メートルぐらい先から火炎放射器を使って近づいて来る。行き場がなく喜屋武岬辺りを行き来した。日本の陸戦隊と思われる三名の軍人がいて、僕らの家族が「手榴弾を下さい」と言ったら、「君らは民間人だから逃げなさい」と言われた。名城の浜まで逃げたら、偶然にもそこで兵隊の三男兄貴と再会して、どうせ死ぬのならみんな一緒だと、家族全員手を挙げ投降しようと歩きだしたら、周りにも大勢の人が手を挙げていた。

いろいろと取り調べを受け、三男兄貴は兵隊だから別にされ、僕と長男兄貴はそこに一か月くらい抑留され、作業をさせられた。その後、野嵩で家族と一緒にあった。

福治友二郎さんの体験

福治：僕ら一年生は、鉄血勤皇隊には動員されていない。家族と行動するよう言われた。最初は大里の古堅にいたが、南部から攻めて来るという情報が入ったものだから、母の実

家に近い西原の棚原に隠れていた。今度は中部から攻撃されるといので、西原から与原を通り南に向った。中城湾には、敵の軍艦が何十隻も並んでいた。

今の上の森公園あたりで日本兵につかまり、「戦場（中部）から来ているから、君らはスパイだ」と疑われ、母が、知人である浜田兵舎の中隊長と少尉の名前を挙げ、ようやく納得させた。

それから、当時の大里村役場の後ろの壕に避難した。大城にある山の壕に入っていて、五月二十七日の海軍記念日になれば、日本軍が来るから大丈夫と聞かされたのを覚えてる。

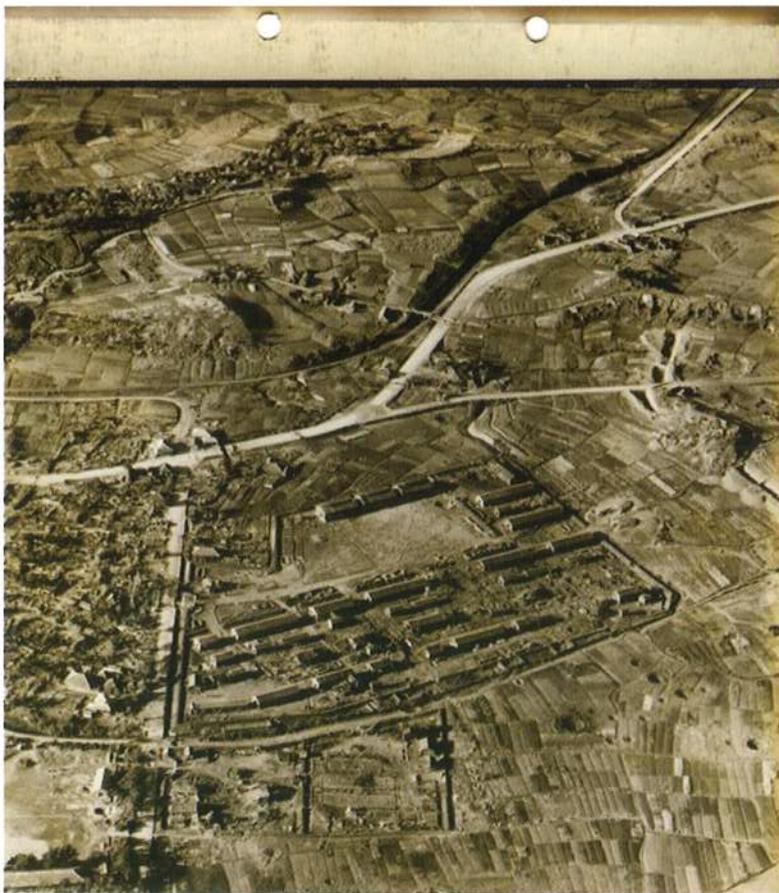
僕は南部の地理に詳しくなく、お婆さんから波平、潮平といった地名を聞いた。島尻では、迫撃砲や榴散弾が多かった。糸満の米須では壕に入れない。今の平和祈念堂付近に隠れていたら二〇メートルほど先に米兵が立っている。米兵を見てみんなビックリして手を挙げて

たら、おじさんが持っていた懐中時計を取り上げられ、歩くよう指示された。具志頭の港川辺りからGMCのトラックで玉城の百名へ連れて行かれた。

百名へ行く前に、コップ一杯の水が飲めたら自分たちは殺されてもいいと、母が少し英語を知っていたので、「ギブ ミー ウォーター」と言ったら、米兵は水缶にいっぱい水を入れて持って来た。

捕虜、収容所へ帰村

戦後与那原に戻って来るまでの間、何度も収容所を移動させられた。主な移動地は、辺土名さんが泡瀬へ野嵩へ南風原の宮城へ与那原。金城さんと山内さんが百名へ仲伊保へヤンバルの大浦・二見へ大里の大城へ与那原。福治さんが百名へ知念へ与那原であった。



CV-10 374-1 0730(-9) 1 APRIL 1945 - COMF.

BARRACKS AT YONAHARA TOWN, OKINAWA. THE PHOTO SHOWS THE RESULTS OF AN ATTACK BY OUR BOMBERS AND TORPEDOES ON 31 MARCH. APPROXIMATELY ONE THIRD OF THE BUILDINGS HAVE BEEN DESTROYED AND OTHERS DAMAGED. A GROUP OF THREE BARRACKS IN THE CENTER FOREGROUND, HIT BY TWO SMALL BOMBS, BURNED TO THEIR FOUNDATIONS.

米軍本島上陸日の与那原（空撮）

アメリカ空母ヨークタウンの艦載機が低空撮影した与那原。中央に浜田兵舎が見える。

1945年（昭和20年）4月1日撮影
資料：藤本文昭氏（愛媛県）



米軍による爆撃で壊滅的な被害を受けた与那原のまち

手前は前線に向く前に休憩する米兵。

1945年（昭和20年）5月24日撮影 資料：沖縄県公文書館

聞き取り調査
人々の証言②

熊本への
一般疎開

【大見武区】

桃原 ハツ子

私は、昭和八年、与那原の大見武に生まれました。父は武信（大正元年生）、母はカメ（大正二年生）、きようだいは、私が長女で、長男・武一（昭和十二年生）、次男・勝正（昭和十七年生）、三男・武吉（昭和十九年生）です。祖父母も一緒に暮らしていました。

当時、与那原国民学校（現在の青

少年広場付近にあった）に通っていましたが、昭和十九年夏ごろ、戦況の悪化とともに学童疎開の命令が出され、私と武一は、学童疎開に申し込みをしました。

しかし、この年の八月四日に末っ子の武吉が生まれ、二週間ほど経っていたこともあり、一般疎開として武吉と母も共に行くことにしました。これは兵役経験のあった父の判断でした。

八月二十一日、私たちは最初、対馬丸に乗船するというので、いったん乗り込んだのですが、なぜだか分かりませんが、対馬丸には那覇の学童らが乗ることになり、私たちは別の船に移されました。与那原の学童の船（和浦丸）でもありませんでした（ハツ子さんの船は暁空丸と推測される）。

船上で、母はサラシで作った白帯で家族四人を結び、「船を飛び降りる時は一緒だよ」と言って、そんな準備もしました。

対馬丸のことを思うと、自分の身代わりとして犠牲になったようで、今でも心がジーンと痛みます。戦後、海上慰霊祭に参加させてもらえないかとお願ひしたこともありました。

私たちは、宮崎県へ行く予定でしたが、そこは疎開者でいっぱいだった

ため、宮崎を経て熊本県河原村（現・西原村）に八月二十七、八日頃に到着しました。

一般疎開者は、二〇名（四〜五家族）ごと各村々のお寺に住み込み生活をしていました。私たちの団体は、みんな大見武の人。別の団体には、大見武に混じって与那原の安次富さんという四、五名の家族がいたと思います。この団体とは近いので、よく情報交換もしていました。他の団体の様子はよく知りません。

私のいた村は、待遇がよかったほうだと思えます。村をあげて歓迎され、数日間は、婦人会の方が食事を持って来て下さいました。

私たちの団体の四世帯には、それぞれに赤ちゃんがいて、お寺の境内で暮らしていました。母は農家の手伝いに行き、そのかわりに米や野菜を分けてもらう生活でした。母が出かけるときは、生まれたばかりの弟をおぶって学校に行きました。泣くといけないので窓際に立って、黒板の字をノートに写して、テレビドラマの「おしん」みたいでした。

その当時、私は小学校五年生でした。地元の生徒と一緒に河原国民学校で、クラスでウチナーンチュは私ひとりでした。

熊本に行つて半年くらいは、沖繩と手紙のやり取りができました。手紙で知つたのは、十・十空襲で南風原の与那覇に爆弾が落ちたこと、与那覇のサーターヤーに落ちたらしいこと。大見武は大丈夫だと書いてありました。私たちの家の防空壕は、今の大見武集落センターのすぐ下に掘つてあつたのですが、その壕も家も兵隊が占拠して、家族はヤギ小屋で暮らしていることも手紙で知りました。この手紙が昭和十九年十二月頃ではなかつたでしょうか。昭和二十年の初め頃までは手紙が来ていました。



ある日、私は母と一緒に蒸しパンをたくさん作り、与那原の学童疎開の人たちに届けようと、熊本駅からバスに乗り換えて八代を目指しました。もう日も暮れかかつた頃、人の話を頼りによくやくたどり着いた村には与那原の生徒はおらず、南風原か東風平かどこかの生徒がいました。与那原の同級生が見つからず残念な気持ちではありましたが、持っていた蒸しパンを彼らにあげると、その中の二人、小学校四、五年生くらいの子が、私と母について来ました。おそらく、「この人たちについて行けば、

食べ物がある」と思ったのでしよう。

本当にかわいそうになつてね。もう心が痛くてね。私は親と一緒に三度の食事をちやんと食べているけれど、この子たちはお腹すかしているんだなあって。何かあげようと思つても、何もあげられない状況でね。母は涙を流して、「ワ

ラビヌチャー イ

ッターヤー イクサニューヤクトウシカタネンサヤー ケーティキレヤー(子どもたち、戦争の世だから仕方ないんだよ。帰つてちょうだいね)つて言つて、二人を帰しましたよ。あの気持ちは今でも絶対忘れません。



昭和二十年八月十五日の終戦までは、村からの差し入れがあり、お米や麦、タケノコ、おいも等を牛に乗せて届けていただきました。

しかし終戦後は、村の援助が打ち切りになり、とても大変でした。村の空いている畑を借りて共同作業。



米軍政要員によって収容所に収容されるのを待つ住民

前列右より小橋川朝起の娘、城間貞市の母。2列目、与原区長小橋川朝起。3列目右より長嶺マカト、長嶺由保の各氏。

1945年(昭和20年)6月12日撮影、旧玉城村親慶原
資料:長嶺由康氏(与原区)

母は農家の嫁といつても、沖繩では子守りや炊事が主で、野良仕事の経験は乏しく、慣れない作業にそうとう苦労したと思います。その頃は一食もぜいたくには食べられない、切り詰めた状況でした。それでも戦地から引き揚げてきたウチナンチュたちにご飯を与えたりもしました。どこの誰かも分かりませんでした。「沖繩の人は親戚さ」という気持ちでした。



今でも、熊本の方たちとは交流があります。私たちがいた村の方は特

に優しく、人の情けをたくさん受けました。

坂本則雄^{のりお}という先生には、たいへんお世話になりました。小学校六年の時に、私の進学を考えて、「受験しに行こう」と言つて自転車で迎えに来たんですよ。

結局、試験は合格しましたが、汽車で通学する金銭的余裕はなく、入学することはありませんでした。

坂本先生とは、戦後も長い間、文通していました。先生には私と同じ歳の娘さんがおり、先生がお亡くなりになつた時には、この方から連絡を受けました。

村の助役さんや疎開者のお世話係の方、お寺のお坊さん、近所の方々にも、とても親切にしてもらいました。あの当時、受け入れるほうも余裕はなかつたでしょうに。



沖繩には、昭和二十一年十一月に戻つて来ました。長崎の佐世保を出発し、インヌミヤードウイ(※今の沖繩市高原の小字上原、呉屋原に設けられた引揚者収容所)に到着しました。

沖繩を出るときは、三か月で戻つてくると聞かされていたので、現金もあまり持たず、父の写真も持って



米軍の物資補給地区となった与那原の浜

艦砲穴（砲弾で開いた大穴）、戦災をまぬがれた大城實氏の家。現在の青少年広場付近
1945年（昭和20年）6月27日撮影 資料：沖縄県公文書館

行かなかった。その「三か月」が「三か年」でしょう。だから父の写真は手元に残っていません。

戦後に親戚から聞いた話ですが、祖母と弟・勝正は、いったん金武の嘉陽に疎開したけれど、南部に戻って来てしまった。おそらくヤンバルは食糧難だったのでしよう。勝正は、昭和二十年六月に糸満の摩文仁で艦

砲の破片が頭に当たり即死だったそうです。祖母もその時にやられ、数日後に息をひきとったそうです。祖父はヤンバルの汀間で栄養失調のため亡くなっています。

父は、十・十空襲のすぐ後、防衛隊に召集されたそうです。一度兵隊に行った経歴がありま

死したそうです。遺骨は、昭和二十二年頃に自宅へ届けられました。母と私は、三十三年忌にサイパンの慰霊祭に参加しました。

疎開時の父の判断で、母と私と弟二人は助かりました。父は戦争を経験し知っていたから「早く行け」と言ったんでしようね。

(終)



戦後の与那原販売店（親川にて）

左から照屋実、安谷屋ウシ、玉城よし子、森山スミ子、嘉数ヤス、金城廣、宇江城陸秀の各氏
1947～48年頃（昭和22～23年頃）撮影 資料：金城廣氏（江口区）